

SSISS

Scientists Supporting Innovation of School Science

NEWSLETTER NO. 2

2008/2/24

NPO 法人 科学技術振興のための教育改革支援計画

1. ニュースレターの第2号をお届けします。
2. 最近の活動状況
3. ホームページの更新について
4. 正会員の専門分野・協力可能分野の調査について
5. 新学習指導要領について
6. 【連載】理科教育改革の Tips (1) 理事長 大木 道則

◎ニュースレターの第2号をお届けします

SSISS 会員の皆様へニュースレターの第2号をお届けします。今回から大木理事長が本 NPO 法人の目指す理科教育改革についてのお考えを連載でお書きくださることとなりました。是非ご一読ください。ニュースは最近の活動状況が中心です。

◎最近の活動状況

今年度は、本 NPO 設立3年目に当たるわけですが、また、文科省が、理科教育を良くするには、まず小学校のそれを改善するのに力を入れなければならないとの認識のもとに、理科教育支援員配置制度 (SCOT) を作って実施し始めた年にもあたります。幸いにして、本 NPO の存在も認識されるようになり、特に会員の皆様にもご協力いただいたように、東京都墨田区では、12の小学校から活動を要請され、そのうち、11の小学校で実際に活動が行われました。小学校については、都小理と呼ばれる、小学校で理科教育に関心をお持ちの先生方のグループからも要請を頂き、合計で24の小学校で活動しました。これは、飛躍的な活動範囲の拡大があったといつてよいでしょう。これに比べると、中学校、高等学校のレベルでは、昨年度に比べて、華々しい活動範囲の拡大はありませんでしたが、それでも、昨年度程度の実績は残せましたので、全部の学校を併せますと、本年度の活動校数は36校に達し、本 NPO 創立以来の活動校数は、累計で50を超すこととなりました。来年以降も、この傾向を維持すべく、理事会としては、活動要請をしてくださる学校数を増やすべ

く努力したいと考えております。これだけの活動増強ができましたのも、会員各位の積極的なご参加があった初めて可能になったわけで、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

*東京都稲城市での支援活動について (お願い)
東京都稲城市教育委員会では SSISS の活動趣旨に賛成し、20年度から具体化するよう検討を進めておられるようです。同市は多摩川沿いにある人口8万程度の郊外型の都市で、京王線で新宿から30分、JR 南武線で立川から20分、川崎から40分程度の距離にあります。7万の新市民は多摩丘陵のニュータウンに住み、小学校12校、中学校6校です。SSISS 活動してみても良いとお考えの会員はテーマなどとともに砂川一郎理事(i.sunagawa@nifty.com)にご連絡おきいただけると、先方に紹介し計画立案の資としていただこうと考えております。

◎ホームページの更新について

1月9日、16日、2月4日に SSISS のホームページに最近の支援活動についての報告書等が掲載されたのでご覧ください。

<http://utsc2.chem.s.u-tokyo.ac.jp/~inorg/SSISS/index.html>

◎正会員の専門分野・協力可能分野の調査について

正会員の皆様にはすでに廣田理事からのお願いが届いていることと思いますが、現在、皆様の専門分野と支援活動にご協力いただくことが可能な分野の調査を行

っております。同じ調査を平成18年2月にも行っておりますので、その時ご回答くださった方でそれ以後変更のない方はこの調査を無視して下さって結構です。この調査以後に会員調査に回答された方でも、追加・修正等の変更がある方は提出してください。

宛先は廣田理事です。

廣田 穰 〒249-0001 逗子市久木 8-8-78

Mail address: mhirota@pastel.ocn.ne.jp

◎新学習指導要領について

新聞テレビ等で報道されたように、文部科学省から新しい指導要領案（幼稚園教育要領案，小学校学習指導要領案，中学校学習指導要領案）が公表されました。詳細な内容は同省のウェブサイトをご覧ください。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/080216.htm

なお、この案に対して意見公募（パブリックコメント）が行なわれています。締め切りは3月16日です。手続きについては下記をご参照ください。

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/02/08021505.htm

【連載】 理科教育改革の Tips 《1》

理事長 大木 道則

私たちの NPO では、理科教育の「改革」を主張しています。しかし「改革」とは何を意味するのでしょうか。なかなか、会員の皆様に私の考えをお話する機会が得られませんでした。今回、ニュースレターが発刊されて、会員の皆様と私との対話の機構ができましたので、この機構を利用して、私が考えている「改革」とは何かについてご説明し、会員の皆様からのご質問も受けて、それに答える形で私の考えにご理解をいただきますよう、努めて参りたいと思いますので、よろしくお願ひします。

私が、理科教育改革を謳いだしたときに考えていた第一のポイントは、これまでの日本の教育が、学校のレベルを問わず、教師が持っているものを学習者に伝える、すなわち文化の伝承を中心としたものであったことですが、これを、これからの教育、特に理科においては、学習者の理解を図りながら、教育を進めて行く、すなわち学習者を主人公に据えた教育にしないと、教育の改革はあり得ないのではないかということでした。このシリーズでは、このようなことを念頭において、どのようにすれば、学習者の自主性が尊重された教育になるのか、そして、学習者の持つ可能性を引き出し伸ばさせるのはどうすれば可能なのか、私の考えを5回に分けて述べ、会員諸賢のご参考に供したいと思ひます。お断りをしておきますが、私の意見に会員が反論されることは全く自由です。毎回、私のメールアドレスを付けておきますので、ご意見のある方はどうぞご自由にお知らせください

1) 学習の最初に *motivation* をあたえることを大切にしたい。

これまで普通に日本で行われてきた教育法を講義調の教育と呼ぶことにしますが、この講義調では、受講者のやる気を引き出すことは困難です。そこで、1960年代以降の科学教育では、この *motivation* が大事にされることになりました。*motivation* は普通、「動機付け」、あるいは「意欲付け」などと訳されていますが、子供に、興味が持てるような実験をやって見せて、それは「なぜ」と思わせたり、教師が何かをして見せるなら「先生よりよくやるにはどうすればよいのか」といった探求への意欲を持たせ、それをきっかけにして、そのテーマの教育に入ることを言ひます。私は、この *motivation* は、近代の教育において非常に大事な位置を占めており、これなしに、子供の興味を引き付けた理科にすることは不可能だろうと思ひております。

さて、子供を *motivate* できたとして、そのあとどうすればよいかについても、またこれまでの教育を受けてきた我々としては、注意しなければならない点がありますが、長くなりますので、これについては次号のニュースレターで述べます。

*なお、私への質問、ご意見の開陳などは次のメールアドレスへお願ひします。

0354215701@jcom.home.ne.jp

このニュースレターは SSISS 正会員の方々にお送りしています。電子メール版を希望される方は下記宛にお知らせ下さい。news.ssis@mbefnifty.com